

## 科学基礎論学会秋の研究例会ワークショップ「性質の形而上学と因果性」

### 企画の趣旨

小山虎（慶應義塾大学非常勤講師）

「性質とは何か」という問いに対しては、性質を普遍者とみなす理論や集合と同一視する理論（クラス唯名論）をはじめ、いくつもの理論が提案されていることはよく知られている。こういった理論に期待されていることのひとつは、性質と因果性がどのような関係にあるのかを明らかにすることである。というのは、性質にとって何らかの因果的役割を果たすことは本質的であると考えられることには十分な根拠があるからである（このことは、心的性質や物理的性質を考えてみれば明らかであろう）。そこで、本ワークショップでは、性質と因果性の関係に注目した以下の三つの発表を手がかりに、この問いに因果性の観点から光を当てる。

最初の山口による発表では、D・ルイスによるヒュームのスーパーヴィーニエンス（Humean Supervenience）に基づいた因果性の還元的分析が検討される。山口によれば、ルイスのヒューム主義的アプローチは有望であるものの、性質がその因果的役割から切り離されてしまうという問題点を抱えている。この問題にどう対処するかによって、このアプローチに対する評価は大きく違ってくと予想される。

次の海田による発表では、S・シューメーカーの性質の因果説からさらに一步踏み込んだ「因果的トロープ主義」が主張される。これは、ルイスに代表されるヒューム主義を否定し、因果性を中心に据える性質理論だと考えられる。海田は、予想される批判に対し、ライバルとなる他の性質理論との比較を通じて反論を行っている。

最後の佐金による発表では、時制化された性質（tensed property）という、特殊なタイプの性質と因果性の関係が論じられる。時制化された性質は、時間論におけるひとつの立場である現在主義を擁護するために導入されたものであるが、佐金は、時制化された性質がルイスによる因果性の分析とどのような関係にあるかに注目し、時制化された性質がどういうものかを明晰にすることを試みている。

以上の発表を通じて、性質の形而上学において因果性がどのような役割を果たすのかを少しでも明らかにすることが本ワークショップの目標である。